

幼 児 の 教 育

昭 和 二 十 年 四 月

趣
こゝろ

——保姆諸君と語る—— (四)

倉 橋 惣 三

ぽか／＼と暖い今日此頃。爛漫々々咲いてゐる花は誰れにだつて美しい。花が嫌ひださういふ人はある筈がない。たゞ閑ひまのあるなしで、お花見に出かける人さ出かけない人さに分れる。美しいものは誰れだつて好きだ。趣味、無趣味は、たゞ閑ひまのあるなしの問題ださういふのが、先づ一應の理論である。「忙しくて、趣きさうで御さいません」こは、よく聞く言譯けである。その閑ひまを經濟的に換算して、「金がなくて趣きさうですかい」こ、小でんぼうに口をきく人もある。

趣きさは、そんな時閑ひまのかゝり、資本もつてのいることばかりだらうか。勿論、それは趣きを満喫するに必要な、少なくとも都合のいゝ條件であるに相違ない。又、趣味者、殊に風流人風雅人さして人の目に立つまでになるのは、時や金にあかした場合のことであらう。しかし、澤山の時を低趣味に過ごし、ふんだんの金を没趣味に費す場合も少なくないさうか、其の方が多かつたりするのを見るこ、趣きは必ずしも閑ひまさ金さの

問題でないらしい。

あんまり皆さんにうちつけなお話になるが一すああなたの保育室をのぞかせて頂きませう。そこはお座敷でもなし、社交室でもなし、謂はゞ子ぎもの遊び場ですもの、ちらかつてゐるのは當り前である。況してや、高價な壁紙に豪華な調度品で飾り立てゝある處ではない。片づけても片づけても散らかつていふが、子ぎもの居る間、片づける閑だつてないであらう。丈夫一方の實用ものばかりでいふが、子ぎもがちよつと觸つて倒したら直ぐ千金の損失といつたようなものが列べて置ける筈はない。私は何も、そこが常にキチンミ片づき、美々しく飾られてあることを要求する程いゝ、でもない。それどころか、私の趣味を見て呉れ、之れが私の趣味であるといつて、子ぎもの部屋らしい、あざけない散らかりを抑へたり、簡素を失はせたりするところが見えたら、それこそ却つて保姆としての惡趣味として唾棄するであらう。が、しかし、そこは、子ぎもの部屋ではあるが、子ぎもだけの部屋ではない。立派にあなたといふ人のゐられる部屋である。子ぎもの背の届かない高さにある壁の額の繪が何を選ばれてあるか。その繪に臺紙の色の調和がさう考へられてゐるか。之れは子ぎものせいではありませんまい。況して、その額が曲つて（幾日もく）ゐたらさうでせう。ところで今度は、その部屋のあなたの小卓の上に置かれてある草花の鉢は誰れの趣味でせう。それも素焼の黒鉢まる出しでない小さいなカバーは誰れの趣味でせう。數冊立てゝある本の、その列べ方の彩りにくばられてある心づかひは誰れの趣味でせう。……小さなところばかり目をつける言はれるかも知れないが、小さなところが目につくのである。趣きは、そうした、その人も自ら心づかないところに、ちらつて出て來るものだからである。出て來るさういふよりも、それをこそ趣きさういふのであるからである。宵の明星でもないが、ちらつて見えるところに趣きがある。一ぱいに、しかも押しつけるように見せつけ

られたりするミ、折角くの美も雅も趣きミいふものにはならない。

その反對に、けばくしからうが、少しの趣きもこぼれないのは、たゞそれだけのものである。況してや、粗末で亂雑でさにも趣きの宿つてゐないに於て、もう問題にもならない。今私が此の文を書いてゐる室の前に椿の木があり、紅い花が咲いてゐる。それがほんの二輪、葉がぐれにのぞいてゐる。趣きだミ思ふ。南の面の海沿ひの村なごに咲き誇つてゐる花一面の大椿では、美は美、魅せられる程の爛美ではあるが、趣きありミは思へない。金にあかした造り庭に必ずしも趣きなく、閑に任せた浮かれ風流に少しも趣きのないのは、こゝのミころである。

してみるミ、趣きは上はべに張られたものでなく、底に沈んでゐるものである。そこで趣きのある人、ない人ミいふのは、つまりは底に沈んでゐるものを、もつてゐる人もつてゐない人の區別である。その底にもたれてゐるものが、事につけ物につけ、時に觸れ折りに觸れ、趣きミしてふミ出るのである。だから、閑の時よりも却つて忙しい時に、豪奢よりも寧ろ質素の中に、その人のほんミうの趣味が動く。忙しい中に一寸立ち止つて花を見る心。簡素の中に一點の彩りを見せた心。床しくもあり、心にくゝもあるのは斯うした真趣味である。此の真趣味こそ實にその人のものである。

それにしても趣きを解せず、味をもたぬ心の何んミ多いミであらう。がさつ。ひからび。なげやり。すざうりだけでこまやかさも、うるほひも、心入れも、見かへり心もない。だから何んでもが、たゞそれだけであつて、その奥がない。花の美しさを知らないではないが趣味ミならない。事が仕事になつて仕切つて趣きにならない。知るだけで趣きに到らず呑み込みはするが味が感じられない。惜しいミいふよりも、なさけないミいふである。なさけないミいふよりも憂ふべきミである。そういふ無趣味に保育せられる子ぎもは、みんな無趣味になつて仕舞ふであらうから。

そんな趣きなんかさうでもいゝミいふのなら、それまでのお話ではあるが。